

ワンス・スルー・トルーパー

手を洗っていた後輩が戻ってきた。彼は私が教育係を任されている新人で、まだ仕事には慣れないようだけど、優しく一生懸命なところがある。部屋の中央では、ちょうど取引先を招いたプレゼンテーションが始まったばかりである。部屋は暗いが、鼻の穴を膨らませたスーツの男たちが、下半身をもじもじさせながらホワイトボードを睨んでいるのが見える。

「えー、共同開発させて頂きました、『絶対にイカせるバイブ』と『絶対にイカせないパッド』につきました、商品の効果に矛盾があるというご指摘を受けまして……」

スクリーンに映し出された文字を差しながら、申し訳なさそうに喋る茶色のスーツの男は、認めたくないが私の上司である。弱い者を威嚇し、強いものにはへりくだる、それ以外の生き方を知らない男だ。そんな

男が上擦った声で読み上げるパワーポイントには目もくれず、取引先の男たちは熱心にホワイトボードを見つめている。プレゼンの最後を飾る「社員を使った検証」を見ることが、彼らのお目当てだからだ。

ぴちやつ・・・

「・・・先輩、濡れてきましたね。指、入れてもいいですか・・・？」

「うん・・・お願い・・・」

後輩は私の身体の「セットアップ」を手伝ってくれている。プレゼンに臨む女子社員の子宮をほぐすのが、新人の彼に与えられた、本日の重要な役割だ。

ぬちゅっ・・・りゅりゅ・・・

彼の指は男性にしては華奢だが、すらつとして私よりも長い。爪は短く切られている。私の愛液を絡めながら、ゆっくりと膣壁を掻き分けると、すぐに私の子宮口を捉えた。

「先輩、今日は少しふつくらしていますね。体調にお変わりありませんか？」

彼の無垢で紳士的な物言いに、私はすぐに返すことができなかった。生理明けの子宮口は柔らかく、普段より血の通いが良い。しかし女性にとって、年下の男性にそれを伝えるのは堪らなく恥ずかしい。

「大丈夫・・・ありがとう。」

顔が火照るのを気づかれないように、よそ見をしながら答えた。彼の指の腹が子宮をやさしく揺らす。私はその指に意識を向ける。人差し指と中指で挟むようにと教えたはずだが、お胎に触れる感覚がいつもと少し違うことに気づく。

「んっ・・・はぁ・・・あっ・・・薬指、でしょ・・・」

「え・・・？」

私が感触で指を当てたことに、彼は驚いたようだった。子宮口は一般には何も感じないとされる。しかし、それは開発されていない女性の話で、私のように不幸にも幾多の刺激に晒された子宮口は、舌にも勝るほど敏感な器官として育つ。女性は胸に注がれる視線に気づくというが、子宮口に男性の視線が注がれる時は、その突き刺さるような、灼けるような感覚を感じることができる。やったことは無いが、触れた感覚で誰のペニスを当てることもできるだろう。

しばらくの愛撫の後、子宮がすっかり降りたのを確認して、彼は指を抜いた。

「それでは、弊社の社員を使って実演いたします！ 森崎ー!!」

自分の役目が終わった途端、上司は大きな声を張り上げた。先程までの冷や汗はどこへいったのだろう。脂汗を額に光らせながら、にやにやとした表情を浮かべている。上司の怒声に子宮が縮こまらないよう、私は小さく息を吐いて落ち着かせると、注目を集めている、ホワイトボードの前に立った。

ホワイトボードの前に鎮座する金属の台の中央には、いびつな形をしたバイブがそびえている。半ばまではペニスを模しているが、潤滑ゼリーでぬらぬらと光る先端は柔らかい鉤爪のようだ。

「おお！」

馬鹿丸出しの下衆な歓声が湧く。若い女性が組織に従属し、その秘部に指を添え、グロテスクな玩具を膣に迎え入れていくのを、目を輝かせて見ている。日本にこんな企業が残っていて、あろうことか一流の皮を被っていることに、怒りを乗り越して呆れてしまう。

私はゆっくりと腰を沈め、母から授かった大切な子宮口を、自らバイブの先端にしつかりと嵌め込んだ。エラストマーの柔らかい鉤爪が子宮口の側面に回りこみ、ポルチオを啜え込むのを感じると、一度押し殺したはずの恐ろしさが込み上げてきた。

この汚らしい男共の前で、私の子宮は完全に捕われてしまった。これからどれだけ過酷な責めをされ、事前の説明や約束を反故にされたとしても、決して逃げることはできない。この恐ろしさを男性に説明するなら、動作の保証されていない機械で睾丸をガッチリと握られた状態と言うべきか。男性の気持ちなんて、正確には分からないけれど。

現実逃避に頭を巡らせているうちに、腕と脚が縄で縛られていた。上司によればプレゼンを盛り上げるパフォーマンスの一環で、本当に危ないときは強く引つ張れば解けるらしい。いざとなれば縄を解いてバイブの電源を切れば、子宮を守ることができるのは、唯一の救いだ。

「これは多感症対策のパッドです。絶頂を強制的に抑え込みます。」

下腹部にパッドが貼り付けられた。湿布のようだがジェルは生暖かく、卵巣の位置に来るように円形の突起が接続されている。パッドは1ミリの隙間も作らず、私の下腹部に張り付いた。

「前もってお伝えしておきますが、人体使用時の安全性の検証は行っておりません。今回の実証実験は、安全検証も兼ねております。」

私は安全な保証のない人体実験に晒されているのだ。これは処刑とどう違うのだろう。思わず滲み出た涙が悟られないように目を細め、奥の席の人影を注視すると、後輩が操作用タブレットに指を添えたのが見えた。どうすることもできない。私は覚悟を決めて拳を握った・・・

「それでは、スイッチオン！」

上司の掛け声で、遠くで後輩がスイッチを入れる。

周期で、普通に生活していたら、一生受けないはずの刺激だ。この「絶対にイカせるバイブ」は不感症の女性のために開発されたと銘打ってはいるが、その実態は、海外におけるスパイの拷問用に多額の資金を注ぎ込んで開発した「人権を無視した兵器」だ。この商品に、女性に対する愛や情けは微塵も存在しない。〇一秒にも満たずに女性を強制的に絶頂まで打ち上げる悪魔の設計。意識を置き去りにするから、絶頂している自分を他人事のように見ている自分がいるのだ。感覚はすぐに身体に追いついて、重くて、鋭すぎる快感が脳に到達した。

「があああ!?!?? んがひっ!! ああ・・!!あひっ!?!??」

白目をひん剥いて涎を撒き散らし、私は身体を大きく仰け反らせた。勢い余って、私はホワイトボードに頭を打ち付けていた。あれ・・・?

バッシャアアアアア!

頭を氷で殴られたかのような感覚がして、私は目を覚ました。目の前で後輩が俯いている。命令されたのだろう、手には空のバケツを持っている。気を失った女子社員に冷や水を掛けるとは。近頃の活動的な女性団体の耳に入れば、すぐにでも焼き討ちに合いそうなものだけれど、生憎この場所は悪知恵を絞った人々が功をなしており、本当に守るべき女性の危機に誰かが気付くことはない。表向きは女性の給料が男性よりも高い、男女平等の先駆者的存在の優良企業。声の大きい女性ジャーナリスト達は、よく知らずにこの会社を引き合いにだして、よくジェンダーを語っている。しかし内情は、女性社員の身体を備品として扱い、その過酷な労務には到底釣り合わない対価が支払われているだけだ。社員は入社時点で機密保持契約を結ばされ、身内に助けを求めることもできない。毎年、何も知らない女子学生が、期待に胸を膨らませて集まってくる。容姿端麗、学業優秀の女子たちが、自分の生まれ持った美貌と、今まで重ねてきた努力が実って、これから華々しい人生を歩めると期待して……

「起きたか！ 森崎！ お客様の前だろうか！

モニタリング専門部署に飛ばされたのか！ え！？」

お客様の前とは思えない怒号、しかしこれもパフォーマンスになる。客席の男たちは股間をパンパンに膨らませて、顔を上気させて喜びを表現している。

「続き！ 出力28%から47%へ！ 危険予想域に突入！」

ヴイイイイイイイイイイイイン！！！！

心の準備をする間も無く再度スイッチが入れられる。あれ？・・・気を失わない。

「あがああ ああが あああ ああ！？！？」

なぜ？・・・そうか、下腹部に貼られたパッドからの低周波。パッドの出力が再調整されたことで、イク瞬間に、イク直前に無理矢理引き戻されている！・・・だから、気を失えない！

ぴゅぴゅ・・・びちゃ・・・びちゃ・・・びちちっびちっ・・・

壊れた蛇口のように、愛液が止まらない。子宮がずっと震えている。鼻からも目からも液体が溢れ出て止まらない。壊される・・・わたし、会社に殺される・・・？

「やめてください！ 絶対にイッてます！

なのに！ イッてるのにッ！ へんなんですす！！

イク直前のまま！ 戻れないんですす！！」

身体中から液体を飛び散らせながら訴える。死が目の前に迫れば、会社どころではない。

「おなか壊れる！！ 子宮が！ ばかになってるっ！！」

縄がほどけない！ いざというときは解けるんじゃないの！？

下半身が固く台に拘束されていて、腰を浮かすこともできない！ 子宮を逃すことができない！
少したりとも！ わたしの子宮が！ 返して！ 私の！！ 私なの！！

「知るか！ 会社のために壊れるのが社員だろ！」

同調するような笑い声が響く

「もうやべで！！ しんじゃう！ ずぬ！！」

ごろざれる！！ がいじゃにごろざれるっ！！！！

ゲスな声をかき消すように叫ぶ！誰かが助けてくれるかもしれない・・・

・・・しかしこの異様な空気の中では、悲痛な叫びさえ、エンターテイメントと捉えられてしまう。

「出力最大にしろ！！ お前の子宮（カラダ）なんて使い捨てなんだよ！」

使い捨て・・・？ 私の・・・わたしの子宮が・・・？

手を叩く音。拍手が鳴っている？ なにが面白いの？ 人が死のうとしているときに・・・

目の前で、一人の若い女性の、子宮が壊されようとしているときに・・・

どうして、そうやって笑えるの・・・？

ガンツツツツツツ！！！！

私は再び、さらに強く、頭を打ち付けた。

「ばひっ！　ぶへえっ！！　あがぁ！」

喉がやけるように痛む。信じられないような絶叫が喉を裂いたのだ。

ガクガクと震えるたびに、火事場の馬鹿力で無理やり浮いた尻が激しく台に打ち付けられ、その衝撃を全て子宮口が受け止める。子宮口に食い込むバイブが、私の最奥を容赦無く殴る。

ぶひっ・・・ぶほっ・・・！

ふしゅっ・・・ぴしゃっ・・・

・・・ぶっしゃあぁあぁあぁ・・・

膣分泌液が飛び散り、滝のように溢れた。半端に乾いた愛液で、尻がぬちよぬちよする。縄に繋がれた腕に力が入り、腕の腱が切れそうになる。

「がああああああああ！ ああがあ！ があああつあああつあ！」

脳のシナプスが焼き切れるような感覚を最後に、私は気を失ってしまった。

○

当然のように終電の時間は過ぎたあと、冷め切ったケータリングを囲んで、懇親会が行われた。『絶対にイカせるバイブ』のA社と『絶対にイカせないパッド』のB社は、一人の若い女子社員の子宮と尊厳を犠牲に、お互いの製品を認め合い、和解していた。

「森崎ちゃん……子宮大丈夫か、見てあげるね……」

プレゼンを見ていた同僚の男性社員たちが、鼻息を荒くして私を取り囲んでいる。上司の命令で、私はテーブル上にまんぐり返しの姿勢をとり、先の激しいプレゼンで使用した子宮口を同僚に確認させなくてはならなかった。

「森崎ちゃんの子宮は会社の備品だからね・・・
損傷してないか、よくチェックしないとね・・・」

こんな仕事をしていれば、女の裸になんて慣れてしまいそうなものだが、性欲の強さを採用基準にしているのだろうか？男達は互いを押しつけあいながらクスコの中でヒクつく私の子宮口を覗き、嬉々として社用携帯で写真を撮影しはじめた。

・・・カシャ！・・・カシャ！

私の子宮の状態をチェックするため、社内掲示板で共有することが決まったようだ。もちろん私に相談はなかった。カメラの音がむき出しのポルチオに響いて、羞恥に灼けるような感覚だった。

「おい、森崎！」

突然の怒声に、子宮がビクッと震えた。

腰がガクガクして足に力が入らない状態だが、名前を呼ばれたら行かなければならない。そこには私の上司と、さきほどのプレゼン中、私を熱心に見つめていたY社の重役がワイングラスを持って語り合っていた。

「彼女が森崎です。まだ三年目ですが、ウチの若きエースですよ。」

上司は気色悪い作り笑いを浮かべて、一糸まとわぬ私の肩に手を回した。生理的嫌悪で鳥肌が立つ。

「よろしく、これは別嬪さんだ。ぜひ、君と話があったんだよ。」

さきほどのプレゼン、とてもいやらし、いや、感動させられてね・・・

君の口から聞きたい、我が社の企画製品で、君の子宮がどうなったのか・・・」
A社の男は、大物ぶった低い作り声で話しかけてくる。

「それはいいですね。森崎、説明して差し上げなさい。

せっかくだ、そこに四つん這いになって、子宮を見てもらいながらやるんだ。」

上司が早口に捲し立てる。

「いま、そんなことできる状態じゃ・・・」

「森崎、社訓をわすれたのか？」

もう新人社員じゃないんだぞ。」

上司は私に、体温で生ぬるく温まったクスコを手渡しながら、睨みつけた。

「お客様のために、すべてを尽くす……すみませんでした。」

私は震える腰を庇いながらテーブルに登った。早速、それに気づいたギャラリーが集まってくる。

テーブルの上で四つん這いになると、羞恥に震える唇を必死に制して声を絞り出した。

「第1開発の森崎です。ご質問ありがとうございます……」

頭を机に押し付け、尻を持ち上げて思い切り突き出す。相手に子宮口を見せるには、膣をまっすぐに通すのがコツだと先輩に教わった。相手方に子宮を差し出すつもりで、膣の力を抜く。

「まずは、私の子宮口を……ご覧ください……」

ご覧ください、ご覧ください、と心の中で唱えながら、クスコのネジを回す。子宮口が暖かい空気に晒されると同時に、重役の熱い視線が突き刺さる。羞恥に濡れ濡った膣の入り口とクリトリスに鼻息が当たる。

「ヒクヒクしているねえ。とつてもいやらしいよ・・・」

語彙が乏しいし、低俗なセリフだ。セクハラとオヤジギャグのセンスくらいは、もう少し磨くべきだ。それ以外能がない、既得権益だけの男でしょうに。そんな、後で思い出すだけで全身に鳥肌が立ちそうなほどに不快な声と言葉なのに、その遠慮の欠片もなく注がれる下品な眼差しだけで、子宮が灼けるように熱くなってしまう。

「は、い・・・ありがとうございます・・・仰られる通り、私の子宮は先程の責めで・・・完全にできあがっております・・・んっ・・・もう・・・風が当たるだけでも・・・」

「フーーーーーッ！」

「んっ!? ああつつっ!!! はあっああっあああっ!!!」

信じられない。男は酒気を帯びた息を、私の子宮口めがけて吹きつけてきた。腕にブワツと鳥肌が立つ。しかし悲しいことに、私の子宮はもう、不快なものを不快と判断できないほどに火照り、快感を与えられすぎて馬鹿になっていたから、下品な男のアルコールを含んだ臭い息でさえも、私の子宮口は白い分泌液を嬉し涙のように流して受け止めてしまった。

プシッ! プシーツ! ぴちゅ ぴちゃっ

「あっっ……!! はあっ……はあっ……!!」

意思と関係なく絶頂し、潮を吹いてしまった。相手方のスーツを潮と愛液で汚してしまったことを、後で謝らなくてはならない。先輩の女子社員がこうやって理不尽に罪を増やされて、新たに恥辱を与える行為の理由づけをされるのを何度も見てきた。

「森崎ーーーーッ！！！！」

パァァァン！！！！

脇に控えていた上司の平手が私の尻を打つと、私のイキ声に静まりかえっていた懇親会場に乾いた音が響いた。こんな屈辱が、あるだろうか……

「はうつつあつ！！　ごめんなさつ……もうしわけつございませんつ！！！！」

あまりの羞恥と恥辱に溢れる涙を拭いながら、必死に謝罪の言葉を叫ぶ。額を机にめり込まんばかりに擦り付けて、絶頂の余韻で震える腰をなだめながら、尻をよりいっそう持ち上げて膣を開き、子宮口をふたたび取引先の面前に明け渡す。自分の一番弱いところ、一番大切なところ、子宮口を差し出すことでしか、女の私は誠意を示せない。

「まあまあ、上長さん。彼女も心から申し訳なく思っているようだよ。

見てごらん、こんなに尻をつきだして、膣奥まで見通せるように女性器を広げて見せてくれている。うちの社員や彼女の同僚たちが大勢で見ている前なのにな。

・・・まったく、こういう世代には、羞恥心つものがないんだろうね。」

「誠に申し訳ございませんでした。何か彼女にお詫びをさせましょう。」

「いいや、謝罪の必要はないよ。でも、そうだな・・・」

次の我が社との共同開発の案件は、是非彼女を担当にお願いしたいねえ・・・」

クライアントのなかでも最も厄介で過酷な要求が多いと噂の△社。これから数年間、私の担当になることが決まった。